

非暴力と反軍の九条

(16) 古沢 宣慶

元の原稿は「エセー」だったのに、前号ではなぜ「エッセー」になってしまったのか。私が参照した以下の三種の本は、すべて「エセー」である。

- ・宮下志朗訳『エセー』全七巻（白水社）
- ・保刈瑞穂『モンテニユ私記 よく生き、よく死ぬために』（筑摩書房）
- ・堀田善衛『ミシエル城館の人』全三巻（集英社）

堀田によれば「原題は Les Essais」。「普通には、試み、試験、試用、経験などと訳され」、「試論とか、論文、評論、随筆、などと敷衍して訳される」。『随想録』と訳されるが、「実のところ、人間の判断というものがどう働くものであるかについての、試論なのであった」。

私は、宮下訳に一箇所ある「小手調べ」という訳が気に入っている。「わたしの理解したことも判断も、手探りで、つまずいたり、よるめいたり、あちこちにつつかったりしながら、なんとか進んでいくの」だと言う。拙論も同じようなものだから。

モンテニユが『エセー』を書き始めたのは、「サン・バルテルミーの虐殺」があったのと同じ1572年頃からだとされる。保刈によれば、『エセー』執筆の前にモンテニユは、「戦乱を生き抜くこと、それも公正に、

良心に恥じずに生き抜くことを『試みる』（エセイエ、そうした試練）に遭遇していた。そうであるならば、拙文はまた、過去を想い未来を志す、現時点での私の実践人生の「試み」でもあるだろう。

前回私が「カトリックのスペイン」との対語として用いた「プロテスタントのイングランド」に関して、英国国教会はプロテスタントと言えるのか。言えるのならば、イングラントは誤りではないか、との疑問が出されたそう。そして、その疑問に答えて欲しい、と編集者から要請された。

プロテスタントの語義そのものは、1529年にドイツの新教諸侯と諸都市が皇帝に対して提出した「プロテスタティオ（抗議書）」に由来する。英国国教会がローマ・カトリックから独立した一教団となったのは、1534年である。その独立の動機は国王ヘンリー八世の離婚問題であった。山川出版社の『キリスト教史Ⅱ』は、王妃カサリンとの離婚問題の原因を検討した後、「並列的に、良心の悩み、後継者への憂慮、アン（テリン）への情熱を」挙げている。「歴代教皇中最も信用できない無能、無定見の人物といわれるクレメンス七世」のローマとの交渉が難航し、

分離・独立に到った。「宗教改革」とはいつでも、全く信仰の中身のないもので、この時点でプロテスタントとは呼べないようだ。

エドワード六世の治下で、教義のプロテスタント化がはかられ、大陸のプロテスタント運動と画していた一線が崩された。

「今やイギリスは、名実ともにプロテスタントの国になった。」

エドワードの死、メアリの即位によって、カトリック反動が始まったが、その統治は失敗し、イギリスのプロテスタント受容の方向が確定した。

「宗教的人間であるより先に政治的人間であったエリザベス」は、「中道主義」をとった。その政策の下で、カトリックとピューリタンの双方が弾圧された。このエリザベスの治世（1558-1603）が、フランスでの内乱、いわゆるユグノー戦争に当たる。宗教的というよりは政治的立場から、カトリックのスペインに対抗するために、イギリスは大陸のプロテスタント運動の一環として振る舞うようになる（「カサリン」、「イギリス」等の表記は引用書に従った）。

堀田の『ミシエル城館の人』「争乱の時代」には、「アングリカン（英国国教会）と自称するプロテスタントのイングラント」という句が出てくる。この句がどのような文脈で用いられたかが重要なので、この句がある節を引用する。そうすれば、政治上の文脈の中で「プ

ロテスタントのイングランド」が用いられていることがわかるだろう。

「フェリペ二世のスペイン帝国は、たとえそれが水膨れのような帝国であったにしても、この時、世界帝国として最大規模を誇りかつ新大陸からの黄金によって、その黄金時代を迎えていたのであった。やがてフランスのカトリックを支援し煽動するための、スペイン金貨がピレネーの山越しに運び込まれるであろう。スペインに対しては、アングリカン（英国国教会）と自称するプロテスタントのイングランド同様に、警戒を怠ってはならなかった。」

『2 自然 理性 運命』には、「戦略として、ドイツと低地諸国のプロテスタント軍団に諸々方々からの傭兵を加え、これにプロテスタント（国教会）・イングランドを同盟者として持つことが出来れば、低地諸国を支配しているアルバ公爵とスペイン軍が如何に勇猛であったとしても、多勢に無勢である。低地は孤立した島と化するであろう、というのがコリニエーの算段であった。

イングランドとしても、低地諸国には重大な利害関係をもっていた。（略）」

コリニエーはプロテスタント側の指導者だが、彼の暗殺がサン・バルテルミーの虐殺の引き金となる。

「コリニエーは、狂信的なパリ市民の憎悪と、ギユイーズ公の復讐、それにカトリースの恐

怖のために死ななければならなかったのではあったが、ヨーロッパの政治家の場合、国際関係もまた生死にからんだものとなる。イングランドの政治から見れば、コリニエーはフランス宮廷の恰好の傀儡であり、エリザベス女王の国家のエゴイズムの犠牲者でもあった。」

プロテスタントとカトリックはそれぞれに同盟を結成して戦った。

「前者、つまりプロテスタント同盟の支援者は、兵力としてのドイツ騎兵であり、財政的にはイングランドのエリザベス一世が背後にいた。そして後者（カトリック同盟）の背後には、軍事的にも財政的にも用意をととのえた、スペインのフェリペ二世がいた。」

『3 精神の祝祭』では、プロテスタントのオランダへのイングランドの支援が語られ、フランスのプロテスタント同盟が、「エリザベス一世を誘い込もうとしている」と言われる。総じて、「カトリシズムもプロテスタントイシズムも政治そのものであり、その政治に、フランス、イングランド、スペイン、ドイツ諸侯などの利害がから」んでいるのだ（傍点は全そ引用者）。

宗教が本来の宗教たるべき役割を離れて、政治につきものの暴力状況をさらに悪しきものとしている、フランスを舞台にした国際的宗教争乱を説明するのに、「カトリックのスペイン」と「プロテスタントのイングランド」という対語を用いるのは、きわめて適切な表

現である。

再度の引用になるが、モンテーニュの宗教観は次の一節に表明されている。

「このたびの戦争では、人間が導き手となって宗教を利用してゐるのだ。本来は、これと正反対でなければいけないのに。」

「われわれの宗教は、悪徳を根絶やしにするために作られたのに、それを隠し、助長し、そそのかしている。」

本来の宗教は、美徳の人間を育て上げ、政治を平和の方向に導き、暴力と戦争を根絶するはずのものなのに、現実の宗教（キリスト教）は、全く逆に働き、戦争と虐殺と憎悪を煽っている。しかしそれは、神そのものの問題ではなく、人間の責任なのだ。神の問題を保留し、神を論ずることを抑えて、モンテーニュは政治に依る争乱の解決に向かう。主権国家の確立によって、世俗の立場から宗教上の寛容をはかり、内戦を終結させようという「ポリテイク派」に加担する。

主権国家確立による平和の実現とは、国家が暴力を独占し、力によって上から成し遂げるものである。ともかく戦争がなければ良いという平和である。

アンリ・ド・ナヴァール（後のアンリ四世）、J・ボダン、モンテーニュらが寄つて、フランスは王国の分裂を乗り越え、平和を回復する。

（ふるさわ・せんけい／日蓮宗浄鏡寺住職）